

「自然の理法」について

松下理念研究部長 佐藤 悌二郎

これまで本シリーズで取り上げた「繁栄」「生成発展」「素直な心」と同様、「自然の理法」という言葉も、PHP理念でもとても重要な意味をもつ言葉です。

昭和四十七年に発刊された『人間を考える』の「新しい人間観の提唱」文に、「万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である」かかる人間の特性は、自然の理法によって与えられた天命である「まさに衆知こそ、自然の理法をひろく共同生活の上に具現せしめ、人間の天命を発揮させる最大の力である」とあり、「新しい人間道の提唱」文に、「自然の理法に則して適切な処置、処遇を行ない、すべてを生かしていくところ」に人間道の本義がある」とあることから、そのことがおわかりいただけるでしょう。

幅広い意味をもつ「自然の理法」

この「自然の理法」という言葉は、「自然の理法」によって生命力というものが与えられているといったように、「宇宙根源の力」と同じような意味で用いられたり、「宇宙根源の力」が万物に働きかけている法則、つまり「宇宙の法則」と同意で使われたりと、幅広い意味をもっています。特に「人間を考える」では、「宇宙根源の力」といつべきところを、すべて「自然の理法」が使われ、「宇宙の根源力」という言葉が「一カ所」それは神とも、宇宙の根源力ともいえますが「ここで自然の理法による」とあるだけです。

では、「自然の理法」という言葉を、松下幸之助はいつから使ったようになったのでしょうか。残された資料を調べてみると、初めて出てくるのは、昭和二十四年九月のことです。そのとき発表された「PHPのことは 生成発展」に、「これは自然の理法であって、生あるものが死に至るのも、生成発展

の姿であります」とあります。

それ以前の、PHP活動を始めて間もない頃の松下の講演録や「PHPのことは」では、「自然の理法」という言葉はなく、それとほぼ同じ意味のものとして、「天地自然の理」がよく用いられています(他に「自然の理」「天地自然の理法」「自然の法則」「自然の摂理」といった言葉もある)。

そしてこの「天地自然の理」も、「天地自然の理」ともいいます。それは神とも、宇宙の根源力ともいえますが「ここでは自然の理法によるものと考えられる」「人間を考える」ことが、宇宙の秩序はすなわち天地自然の理であって、宇宙根源の力から人間、万物にさし示された道であります。「PHPのことは 礼の本義」というように、「自然の理法」や「宇宙の秩序」と同義で用いられている場合があるかと思えば、「真理が宇宙根源の力になり、これが法則となり秩序となることの全体を指して、天地自然の理といふのです」「PHPのことは 真理」とあるように、宇宙根源の力が真理としてあらわれ、この真理が宇宙の法則として働くことよって、宇宙の秩序が調和ある姿で保たれていること、全体を総称した意味で使われたりするなど、非常に幅広い内容を有しています。

しかも、この「天地自然の理」という言葉も、PHP研究所の創設時につくられた趣意書「パンフレット」PHP研究とPHP運動のなかで初めて出てくるもので、戦後PHP活動が始められて以降に用いられるようになった言葉なのです。つまり「自然の理法」も「天地自然の理」も、戦前には使われていなかったということです。

概念の源は戦前にあった

しかし、松下は、言葉は違っても、同様の概念はもつと以前からもっていたと考えられます。そこで資料にあたってみますと、「松下電器の遵奉すべき精神」の「順応同化の精神」(昭和十二年八月十日に制定)の付随文に、「進歩発展は自然の摂理に順応同化するにあらざれば得難し」という一文のあることがわかります。

さらに言えば、「PHPのことは」に「限らない繁栄と平和と幸福とを、真理はわれわれ人間に与えています」(繁栄の

基)とあるように、「真理」という言葉も、「自然の理法」に近い意味でよく使われていますが、これは一般に日常よく口にする言葉であり、戦前の松下の発言にも出てきます。例えば、産業人の真使命が闡明されたときのくだりで、「全くの真理 千古変わらざるこの真理」といった表現が見られ、さらに「天来の声」といった言葉も出てきます。

このようなことから、松下の頭の中には、戦前から、この宇宙、大自然には人間の意志や意欲を超えた一つの法則、真理といったものが厳然と存在しており、それに順応することが大切だという考えのあったことがわかります。いつ頃からそれが明確に意識されるようになったのかははっきりしませんが、いずれにせよ、その後のPHP理念の思索検討の中で、徐々に明確な概念になるとともに、言葉の吟味が重ねられ、ついに「人間を考える」で「自然の理法」という言葉にほぼ集約されることになったというわけです。

自然の理法に従うことがすべての基

したがって、特に初期のPHP理念に関するものには、同じような言葉がいろいろ出てきて、それらがどう関連するのかが、どう違うのか、あるいは同じなのか、戸惑うわけですが、そこで使われている言葉は厳密に定義されて用いられているわけではありませぬので、読むときは、あまり一つひとつの言葉の違いにとらわれず、何をいわんとしているのか、その本意の把握、理解に努めることが肝要でしょう。

要は、この宇宙、天地自然に理法といったものが働いていることを認識し、これに従っていくことが大切だということ、「生成発展が自然の理法」だから、政治も経済も宗教も、あらゆるものが、この自然の理法、天地自然の理に即せば、おのずと生成発展の姿が生まれてくる、繁栄、平和、幸福が招来されるということ松下は考え、訴えよとしていたのです。この「自然の理法」に従うこと、これこそが松下のあらゆる判断基準、行動基準の基であり、PHP活動も、「自然の理法」に則つた道を求めていく研究であり運動であるといつてよいでしょう。その「自然の理法」に従うためのキーワードが、「衆知」であり、「素直な心」だと、PHPでは考えているわけです。